

国産漆増産のためのウルシの萌芽更新

1 国産漆増産の背景

ウルシの幹に傷をつけて採取される漆は、縄文時代から木製容器など多種多様な漆器の塗料として、また石鏃、矢柄、土器の接着剤として使われてきました。このように縄文人の生活に深く浸透し、使われてきた漆は、現在、漆器の制作、国宝や重要文化財の修理などに欠かせない存在となっており、日本人はウルシと長いかわりを持って生きてきたといえます。

国産漆は、主に塗料や接着剤として国宝や重要文化財の修理など日本の伝統文化の維持に貢献してきました。こうした国宝や重要文化財は、本来の手法で修理することが文化の継承につながります。また、漆（写真1）は、日本の伝統文化において象徴的な資材などであることから、文化庁は平成27年に国宝や重要文化財の修理の事業で原則として下地も含め国産漆を使用する旨を通知しました。その後、長期需要予測調査に

よって国宝や重要文化財の修理に年間約2.2トンの国産漆の生産が必要であることを報告しています。平成30年の国産漆生産量は、約1.8トンであり、今後も深刻な国産漆の供給不足が懸念されるため、国内の漆生産を増大させる必要があります。そのため、全国の各地域で持続的な漆生産が可能なウルシ林を造成し、安定的な需給体制を確立しなければなりません。なお、今回、樹木を「ウルシ」、ウルシの幹の内樹皮で生産さ

れる樹脂と木部の樹液を「漆」と表記します。

2 ウルシ林の更新と萌芽性

ウルシ林を更新させるにはまず植栽用の苗木を作る必要があります。そのためには、種子による実生苗木と分根による分根苗木で育てる方法があります。その他に、漆を掻いたウルシの切り株や根から萌芽した樹を育てる萌芽更新があり、これらは岩手県二戸市や茨城県常陸大宮市などで



写真1 8月に採取された盛漆



写真2 幹萌芽



写真3 根萌芽

行われています。

樹木は台風などの攪乱で枝や幹が折れると、残った枝や幹から新たに枝や幹を出します。これらの枝や幹を総称して萌芽、あるいは萌芽枝と呼びます。ウルシはミスナラ、コナラ、ホオノキなどとは異なり、切り株だけでなく、根から萌芽枝が発生する特性を持っています。切り株から発生する萌芽枝を幹萌芽（写真2）と呼ぶのに対し、土中の根から発生する萌芽枝を根萌芽（写真3）といいます。ウルシの幹萌芽は、地上50cmで幹を伐採すると発生しやすいですが、地上10cm程度では幹萌芽は発生しない場合が多く、樹齢50年以上の太い木ほどその傾向が強いと思われれます。一方、根萌芽は年齢に関係なく発生し、太い木ほど根の分布範囲が広いので、より広範囲に発生します。根萌芽を発生させる樹種としては、ウルシの他に、ニセアカシア、アカメガシワ、ヤマナラシなどが知られています。

3 萌芽発生のための地拵えと保育・管理

根萌芽は切り株を中心に放射状に発生し、切り株に近い所ほど多数発生する傾向にあります。遠いものでは切り株から3m以上離れた場所

からでも発生します。そのため、生育の支障にならないように切り株周辺には伐採木の枝や幹を残さないようにし、なるべく林外に持ち出すか、一定の決まった場所に積み重ね、萌芽の発生箇所を確保する必要があります。

ほとんどの萌芽枝は、5月以降に発生するため、林地はすでに雑草木に覆われた状態となり、その被圧で生育不良となる場合があります。特に、根萌芽は発生箇所がランダムな上、大きさにばらつきがあるため、雑草木の下になつているものが多い傾向にあります。そのため、萌芽枝の発生初期前後に、林地全面の雑草の刈り払いやつる切りを行っておくと、発生した萌芽枝が目につきやすく、雑草による被圧も受けにくく考えられます。その後は状況を見ながら、適宜下刈りやつる切りを行うことが大切です。発生した根萌芽に竹支柱などで目印を付ければ、その後の管理がしやすくなります。2年目以降も数年下刈りやつる切りを継続する必要があります。ただし、萌芽枝は、植栽木に比べ初期成長が速いため、萌芽更新では苗木代や植え付けの経費がかからず、下刈りなどの管理費だけで済むと考えられます。また、根系がすでに発達しているこ

とから、初期成長が早く、漆を採取するまでの期間が3〜4年短縮することが期待されます。

4 萌芽枝の成長と今後の課題

発生初期における萌芽枝では、樹高と地際直径の成長が7〜8月まで続きます。優勢な萌芽枝では、5年で樹高が3〜4.5m、地際直径が4〜8cmに成長します。萌芽枝は、植栽木よりも成長が速い傾向にあります。有効土層（ウルシの根が支障なく伸びることができ土壌層）が薄い痩せ地や滞水しやすい湿地では萌芽枝の成長はよくありません。萌芽更新により萌芽枝を育成する場合も、苗を植栽する場合と同様、乾燥しやすい土壌、過湿環境を形成しやすい地形、および土地利用履歴に留意し、萌芽枝を育成すべきです。



写真4 胴枯病によって梢端枯れ症状がみられた萌芽枝

萌芽更新地や植栽地では *Diaporthe toxicodendri* による胴枯病（写真4）が発生し、萌芽枝の枯死などが頻繁にみられています。萌芽更新地で胴枯病がみられた場合、罹病木を除去し、なるべく優勢木を仕立て、その本数密度を1,600本/haに誘導することが有効であると考えられています。今後、漆掻きを行える十分な大きさに育つまでの期間で萌芽枝の成長に及ぼす本数密度と胴枯病の影響を解明していく必要があります。また、ウルシ萌芽木の成長と下刈り回数および漆採取量の関係を調査し、ウルシ生産者にとって必要な収益性を明らかにしていくことが重要です。

森林総合研究所東北支所
田端 雅進
019 (641) 2150